

工藤 開

第59回全日本大学
空手道選手権大会(団体)優勝
近畿大学4年



Kudo Kai

1993年12月2日、迫町生まれ。佐沼小2年の時に和道会はさまに入団し、持ち前の運動神経と勤のよさですぐに頭角を現す。県内、東北では連戦連勝し無敵を誇った。中学卒業後は、東北工大高(現仙台城南高)へ進学し、インターハイ、国体などで活躍。高3時のインターハイで自身初の8強入りと高校生以下の日本代表入りを果たす。2012年近畿大へ進学。2年で先発メンバー入りを果たし、大学選手権3連覇に貢献。日本代表に選出されている。父、母、兄の4人家族。身長178^{cm}、80^{kg}、血液型B型。尊敬する格闘家は魔裟斗。

試 合終了の瞬間、工藤は叫びながら拳を突き上げ、あふれる涙を拭いた。コートの外では、仲間が飛び上がり、喜びを爆発させた。

「気づいたら優勝して、気づいたら泣いていて、気づいたら監督を胴上げしていた。試合後、ビデオで自分の行動を見て驚いた」と、優勝後の出来事をほとんど覚えていなかった。

「第59回全日本大学空手道選手権大会(以下、インカレ)」は11月23日、大阪市港区の大阪市中央体育館で開催され、近畿大が京産大を破り、3年連続15回目の優勝を果たした。

今大会、最大の山場は準決勝国士館大戦。これまでと打って変わり、土俵際まで追い込まれてしまう。

近大は、茂矢、日本代表に選ばれている工藤と西村の3本柱が勝ち星を上げリズムを作る。これまで、1人も勝ち星を上げられない試合はなかった。しかし、先鋒茂矢が引き分け、次峰山城は大差をつけ勝利するも、中堅西村がまさかの敗戦。1勝1分け1敗で出番が回ってきた。常には、大将で登場する工藤。しかし「決勝に向けて体を動かしてこい」と監督の指示により副将で出場した。いつもと違う順番、柱2人の負け越しに、らしい試合展開を見せる。

「いつもならば、勝って試合を決めるだけ。今回は後ろにもう1人控えている。無理はせず、大将勝負でよいのでは。そんな考えが頭をよぎり、引き分けに終わる。1勝2分け1

敗の五分の星で、大将船橋に命運を委ねた。船橋も全国優勝の経験がある実力者。負けることは考えづらい。しかし、そこに落とし穴が。

常に先攻を許してしまい、2-3とリードされたまま、試合時間は残り3秒に。誰もが国士館大の勝利を確信した瞬間、船橋の突きが決まり、3-3の同点に追いつく。試合はそのまま終わり、辛くも内容差(ポイント数が多い)での勝利。チームに笑顔はなかった。

「全員が重圧を感じ、いつも通りに動けなくなっていた。このままでは優勝できない」と工藤は、女子メンバーも含め全員を招集。ミーティングを開き「何のための苦しい練習だったんだ」と、部員と自身にげきを飛ばした。

決 勝戦、メンバーの表情は見違えるほど気力に満ちていた。5分の星で迎えた大将戦、負ければ優勝を逃す大一番も、気迫の突きで日本代表の大西を倒し、創部70周年、3度目の3連覇を勝ち取った。

創部70周年の節目、求められる結果は最低でも優勝、最高でも優勝。「本当にきつい1年だった。節目の優勝は使命。周囲の期待は非常に大きく、目の前の敵だけではなく、見えない重圧とも戦ってきた。主将として、部員の前で絶対に弱音は吐けな。この結果はうれし半分、ほっとしたのが半分」と、自身を楽天的でひょうひょうとしていると評する工

藤には似つかわしくない言葉だ。それだけ、このインカレに駆ける思いは強かった。

「これで、お世話になった監督やコーチ、OBなどの関係者、家族や和道会の皆さんに少しは恩返しができたと思う」と、工藤は照れくさそうに感謝の気持ちを口にす。

小2で空手を始め、すぐにそのとりになった。「練習すればするほど強くなっていく。ほかのスポーツは考えられなかった」と空手との出会いを振り返る。

小中学校時代は、東北で無敵を誇った。しかし、全中やインターハイでの個人戦では結果が残せず、高校では8強が最高の成績だ。日本一を目指し、大学最強の近大を選択。「近大しか考えられなかった。強くて立ち居振る舞いもかっこいい。どんなに厳しい練習でもついて行くと覚悟を決めていた」。

1日、2部、3部の練習は当たり前。空手道部は寮生活のため、息を抜く暇はない。大3の時には、日本代表合宿中に烏口鎖骨靭帯を完全断裂。現在も靭帯は切れたまま。困難もけがも全て、絶対日本一になるという強い気持ちで乗り越えてきた。「練習もけがもなんとかなるって思っていたらなんとかなった」と人前で苦労は絶対に見せない。

大 学卒業後の目標を聞いた。「4年後の東京五輪を目指す」
現在空手は、東京五輪の追加種目

最終候補に残っている。世界での競技人口も多く、正式種目になる確率は非常に高いといわれている。
4年後は26歳。選手としてピークを迎える。この最初で最後のチャンスに全てをかける。

工藤は、マイナス84^{kg}級で日本代表に選出されている。この階級には、現在全日本2連覇、先日開催されたアジア大会で優勝した、空手界の絶対エース荒賀龍太郎がいる。「彼は空手家の憧れ。国内だけではなく、世界でも人気がある。自分もその一人だった」と語る。代表入り当初は「練習を教えてほしい」と思い、実際教えるを受けた。しかし、近年その気持ちに変化が。

「荒賀さんから1ポイント取って本気を出させたい」「憧れのままで先がない。五輪代表は狭き門。そこを目指すには、どんな相手でも倒さなければならぬ。今の自分には、荒賀さんは憧れではなくライバル」ときっぱり。

工 藤は「今のままでは世界で勝てない。これまでの型を捨てて、世界仕様に自分を変えていく」と徹底的に空手と向き合う覚悟だ。
常に「何とかなる。どうとかなる」と考える工藤。性格はそうかもしれない。しかし、行動を起こしたときは「何とかする。どうにかする」で結果を出してきた。4年後、「何とかかなりました」と、笑顔でインタビュを受ける工藤の姿が目につく。